

第22回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ④

「4泊5日間の貴重な経験」

金 秀炫(キム・スヒョン)

釜山国際外国語高等学校 2年



私の人生初めてのキャンプだった日韓高校生交流キャンプは、まるで夏の夜の夢のようだった。キャンプに参加する直前までもキャンプに無事についていけるだろうか、新しく出会う友達はどんな人たちなのだろうか、その友達と仲良くできるだろうかと心配が絶えなかった。しかし思いの外、私たちはあっという間に仲良くなり、短くて長い5日間の間に一生忘れることのできない思い出を共有する仲間になった。

初めてキャンプ会場に足を踏み入れたとき、そこには見慣れない風景が広がっていた。ソウルという地域も馴染みがない上に、そこには初めて見る顔ばかりならんでいたからだ。学校で24時間、毎日同じ友達と先生の顔だけ見ている高校生としては、このような経験が新鮮でもあり、ぎこちなくもあった。

しかし、経験豊かなメンター先生のおかげか、空港からすでにもものすごい調和力を見せてきたチーム1の日本のメンバーたちのおかげか、チーム1は「WE ARE THE ONE」

というスローガン通りに、いつの間にか一つになっていった。うちのチームは、自己紹介のときより、チーム・スローガンを作りながらより仲良くなれたような気がする。形式的な自己紹介よりは、実際に体を動かしながら何かを成し遂げようとしたときに、お互いに出し合ったアイデアをまとめて一つの結果を出そうと努力する姿が見られたような気がする。

そして初日の夜は、同じ部屋を使うことになった日韓のルームメイトたちと一緒に短い時間の間、たくさん話をした。日本のルームメイトとの話の中で一番驚いたのは、学校の日程についてだった。通常午後5時にすべての授業が終わってから補充授業と夜間自習につながる韓国の高校とは違って、日本では午後4時頃に、すべての授業が終わって夕食を食べないまま家に帰ると言うのだ。さらに、冬には日が短いからと暗くなる前に、早めに家に帰してくれると言っていた。私たちはあまりにも違う日韓の学校の日程について知り、驚きを禁じ得なかった。他にも、お互いの誕生日や兄

弟についての話など初対面の同世代の人たちが交わすような話しをしてから眠りについた。

初日は、日韓の違いについて気付かされたが、二日目からは日韓の学生が同じ考え方や感情を共有し、話し合いをするなど、お互いの共通点について気付いていく時間だったと思う。その後続いた韓国経済現場体験や事業ブース作りのための話し合いの過程で、うちのチームだけではなく、キャンプに参加した全ての学生が英語、日本語、韓国語、それから身振り手振りまで交えて自分の意見を伝え、その意見を共有する時間を過ごした。韓国経済現場体験のために外出したときには、ソウルの街とお店などについて話し合い、事業ブース作りのときには、お互いに出し合ったアイデアを一つにまとめていった。うちのチーム1は、他のチームとは違って、チームの事業アイテムにほとんどのメンバーのアイデアを取り入れた。みんなでアイデアを出し合ったときに、良いところを残して、それらを組み合わせ一つアイテムとして完成させていったからである。チームメンバー全員が満足できる結果物を生み出すためにみんなで努力した。日韓の学生の間でチームメンバー全員の言葉を通訳しなければならなかったメンターさんが一番苦労したのではないと思う。事業アイテムを決めるまで、他のチームよりたくさんの時間と話し合いが必要となったが、その過程があったからこそ、うちのチーム1が優秀賞を受賞するという素晴らしい結果を得られたの

だと思う。

みんなで一生懸命に努力し合う過程を通して想像以上に仲良くなれただけに、別れるのが本当につらかった。すでに経験済の先輩たちが話していた通り、日本の友達を乗せていくバスの前は、涙の海になってしまった。車窓越しによく見えもしない日本の友達に向かっていつまでも手を振り続けた。泣くまいと我慢していた涙がいつの間にか溢れてきた。より悲しくなったのは、日本の友達とだけではなく、韓国の友達とのお別れが待っていたからだ。5日間常と一緒にだった友達と、これからはいつ会えるか分からなくなってしまったのだ。それでも、お互いに電話番号やSNSのIDなどを交換したので、大人になっても変わらず連絡を取り合えると信じている。

キャンプ期間中にあったことをまだ書ききれていないのに、すでにほとんどのページが埋まってきた。キャンプについてなら、私は一日中話し続けられる気がする。それくらい、今回のキャンプは私の人生で二度とない、生涯最初で最後になる物凄く特別な5日間だったと言える。

今回のキャンプを通して感じた一番大きな点は、韓国の高校生であれ、日本の高校生であれ、結局私たちは同じ世代を生きている同じ10代の青少年であるということだ。正直にいうと、キャンプに参加する前までは、韓国の学生と日本の学生の間にはお互い理解し合えない点があると思っ

ていた。しかし、実際は、その反対だった。日本の学生も韓国の学生と同じことを感じ、同じことに興味を持つ同年代の友達だった。むしろ日本の学生は、韓国の学生よりバラエティに富んだ考え方を持っていたり、知識の幅も広がったりした。同じことを見て笑ったり、同じことを見て泣いたり、同じことについて悩んだりする私たちはみんな21世紀を生きている10代の青少年だからこそ、より簡単に仲良くなれたのではないかと思った。

キャンプのオリエンテーションのとき、司会の方の話通り、初日はお互いに自己紹介をするために、二日目は事業アイテムを考えるために、三日目は作業するために、四日目は別れが惜しくて思い出作りをするために、ゆっくり眠れた日が一日もなかった。それでも、疲れを感じる余裕すらないほど慌ただしく楽しい日々だった。おそら

く今回のキャンプ参加者みんなと一緒にだったからそう感じる事ができたと思う。

キャンプを終えた私の感想は、言葉には表せないほど楽しかった！に尽きる。これが、私が最初に「第22回日韓高校生交流キャンプ」はまるで夏の夜の夢のようだったと話した理由だ。私が大人になっても、今回のキャンプでの経験は決して忘れることのできない、まるで夢のように私の中に残り続けるだろう。

こんな素敵な思い出を作らせてくれた80名のキャンプ参加者のみんなといつも私たちをサポートしてくださったスタッフの皆様、そして5日間両国の言葉を通訳してくださった、また私たちの素敵な思い出作りを精一杯協力してくださった8名のメンターの皆様、本当に有難うございました！

「かけがえのないもの」



柿沼 伸太郎

宮城県仙台第三高等学校 1年

ひと事で言うと、予想を大いに裏切られた。良い意味で。

まだ、15年しか生きていない僕だが、こんなにも刺激的で感動的な5日間など、経験したこともなかった。この素晴らしいキ

キャンプは、たくさんの事を教えてくれたし、最高の思い出や、仲間をくれた。

1日目。私はもう興奮と不安でいっぱいだった。空港に着くと続々と日本人高校生が到着してきて、それは更に高まった。幸いにも、最初に話しかけた人と仲良くなることができ、心が安堵した。初海外だった僕は、もう何もかもが新鮮だったのを感じている。

韓国に着き、韓国人高校生との顔合わせをし自己紹介をしましょう、となったのだが、韓国語の勉強をして来なかった私にとって、それは過酷な試練だったが、ぎこちないながらも、なんとか互いに距離を縮められた。

2日目。「流通・販売サービス」のカテゴリーの我々は、「ロッセワールド」に行った。

エンターテインメントの聖地と言っても過言ではないような場で、皆で水族館に行ったり、ショッピングをしたりした。

ふと気がつく昨日会ったとは思えないほど、みんな仲良くなっていた。それもそのはず、私の班の韓国人高校生は、日本語が上手すぎるのだ。英語で精一杯の自分と比べると、本当に凄と思う。きっと彼らは日本人を名乗っても生きていけるだろう。そんな彼らに乗せられて、韓国一辛いカップラーメンを食べてしまったり、散々だったが、本当にたくさん笑った1日だった。

またこの日から、事業アイテムを決める話し合いが始まった。何人かの人が、アイデアをすでに考えていたので、すぐに活

発なディスカッションが始まった。最終的に、高齢者の孤独死を防ぐための事業を企画する事になった。

3日目。この日は試練の日だった。我々の班は、常に全員で情報を共有しながら、試行錯誤を繰り返していた為、作業の進捗がちょっと遅かった。それに、日常会話のレベルではなく、より専門的な話になっていくため、コミュニケーションが非常にとりづらかった。しかしながら、我々の班は、メンターさんの素晴らしい通訳に助けられながら、互いの話をよく聞き、課題を見つけ、解決するというプロセスをひたすら根気強く積んだ。よって、少し時間はかかったけど、どこの班よりも詳しく掘り下げた事業を企画できたと思う。

事業ブースを作る時は、効率を求める為、それぞれが自分の得意分野を担当した。映像作りのプロがCM、女性陣を中心に看板類を作り、男性陣は事業アイテムの売り込みを考えた。みんなでCM撮影をした時は、本当に楽しかった。主演のなんとも言えない演技を、映像作りのプロが編集で上手くフォローしたりと、これぞまさにチームプレーだった。

女性陣のブース作りは物凄い速さで進み、なんとか昨日の遅れを取り戻しつつあった。しかしながら男性陣は、価格設定と売り上げ計算という、恋の方程式並みの難問に取り組んでいた。これまた手間のかかる作業で、日本と韓国にはどれ位の一人暮らしの高齢者がいて、年金受給額から、売り上げが見込めるのは何パーセントで…と考えて

いくうちにどどんきりが無くなっていった。これによって時間を食ってしまい、3日目の作業はそこまですべて終わった。でもブースは完成したし、あとは売り込み戦略だけだったので、まだなんとかいけそうな気がしていた。

4日目。いよいよブース発表の日だ。キムチを食べて気合いを入れた後、女性陣にも手伝ってもらい、売り上げの計算をすぐに片付けた。意外と大きい収益を見込めることがわかり、みんな驚いていた。

ブース発表が始まると、我々の班は強みを発揮した。時間をかけて全員で理解してきた分、みんなの説明し、売り込む事ができた。来賓の方々に、自分達の事業に賛同して貰うのは簡単ではなかったが、深く掘り下げた質の高い企画を武器に、投資金を集める事ができ、その甲斐もあって、我々の班は最優秀賞をもらった。

最高の結果を得た私達は、その日は遊びまくる事にした。美味しいご飯を食べて、夜はみんなですつと遊んでいた。他愛のない会話も全てが楽しくて、とにかくみんなが笑顔だった。

5日目。来てほしくない日が、とうとう来てしまった。この日は、みんなが仁寺洞へ行き、ショッピングもしたし、韓国の伝統料理も食べた。この日でお別れなんて、忘れていたし、考えたくなかった。しかしバスに一步一步近づく度に、5日間の思い

出が走馬灯のように頭を駆け巡った。そうになると、もう涙は抑えられなかった。

前日、みんながメッセージカードを書き合ったが、それじゃあ足りない。もっと、話したい事があるし、知りたいこともあるし、もっともっと一緒にいたかった。ただチームのみんなは本当に優しくかった。私が泣いていると、「これでお別れじゃないよ」と、みんなが言ってくれた。おかげで、笑顔で「またね！将来、俺らでイノベーションを起こそう！」と手を振ることができた。

キャンプの思い出を、文書で表すなんて不可能だ。書きたいことが無限に出てくる。この5日間のことは、何があっても一生忘れないだろう。最初は不安もあったけど、このキャンプ中、私達には、言葉の壁も文化の壁も国籍の壁も何も障害はなかった。相手を受け入れる気持ちを忘れずに、同じ目標をめざすことができるなら、私達を遮るものなど、なんでも乗り越えられる。

私達は同じ高校生として、刺激をたくさん受けながら全力で5日間を過ごした。おそらく、いや絶対に、このキャンプの友達は一生涯のものになるだろう。この素晴らしいイベントに関わった全ての人に感謝したい。

皆進んで行く道は違うけど、これからの世界を作っていく最高のパートナーである事に違いはない。

いつか必ず、再会を果たそう。

皆さんと出会えて、本当に良かった。

本当にありがとう。

「心でコミュニケーションをとる方法を学ぶ」

金 賢洙(キム・ヒヨンス)

ハナ高等学校 2年



日本語を学んだことや日本に行ったことがないせいか、日本という国に対する好奇心が人一倍強かった。また、日本の友達を作りたいとも思っていた。そんなときに見つけたのが、「日韓高校生交流キャンプ」だった。4泊5日の間、日韓の高校生と一緒に過ごしなが、ビジネスを企画するという活動内容に期待が膨らんでいくと同時に、日本語が喋れない私は意志疎通をどうすればいいかという不安も大きくなっていった。事前説明会では、ほとんどのチームメンバーに会えなかったのも、どんな人たちと同じチームになったのだろうかと思ったりもした。

期待を胸にキャンプ会場の「ハイソウル・ユースホステル」に到着した。初日だからか、韓国の参加者たちの間でもぎこちない空気が漂っていた。約1時間が過ぎたところで、日本の参加者たちが会場に到着した。それから本格的に自己紹介をする時間になったけれど、全員初対面のチームメイトたちに気軽に話かけることがなかなかできなかった。しかし、チーム名やチーム・

スローガンを決めながら少しずつ打ち解けていった。また、夕食の後、みんなが持ってきた各自の写真を貼って JK マガジンを作ることになったが、紙や写真を切り貼りして飾っていく過程でみんなとより仲良くなれたような気がする。

二日目は、私たちが事業説明会で発表するビジネスを企画するため、セブンスプリングス(ファミリーレストラン)に行き、現場体験を行った。セブンスプリングスの簡単な紹介から経営理念、インテリア及び構造などについて説明を聞いた後、食事をしてから調理実習まで行った。現場体験を行ったおかげで、チームメンバーたちと事業アイテムを構想する作業がよりスムーズにできるようになった。

その後は、ショッピングをしたり、写真を撮ったりしながら、「ホンイク大学」周辺を観光した。

夕方に行った「ゴールデンベル」では、他のチームのシュウヘイ君とペアになって、一緒にクイズに答えたり、おしゃべりしたりしながら、新たにもう一人の友達を作る

ことができた。

三日目は、私たちが出し合った事業アイデアを基に、事業説明会のための事業ブース作りに取り掛かった。事業アイデアと詳細をまとめて、SWOT分析、4P戦略について考え、事業ブースの飾り方について話し合うだけでもかなりの時間がかかった。テーマの「健康」に相応しい色を決めて、ボードを貼り、マーケティング戦略、オンライン・アプリケーション、財務分析、メニューなどを作って貼った。10人もチームメンバーがいるから早く終わるのではないかと思っていたが、事業ブース作りは思った以上に時間を要する作業だった。CM動画作り、アプリケーション・メニュー・マーケティング戦略作り、財務分析など各自役割を分担して作業を進めたけれど、夜遅い時間になってやっと終わらせることができた。一番疲れた一日だったが、チームメンバーたちと力を合わせて作業をしながらより仲良くなれたので、とても嬉しい一日でもあった。

四日目、いよいよ事業説明会が始まった。現在、日本や韓国の企業で活躍されている方々が直接事業ブースを見回りながら説明を聞く形式だったので、緊張で胸の高まりが止まらなかった。最初は緊張のあまり、説明がしどろもどろになってしまったけれど、たくさんの方に説明をしていくうちに自信を取り戻すことができた。説明をした後、(模擬)投資が決まったときには、天にも昇る心地だった。うちのチームだけでは

なく、他の全てのチームが少しでも多くの(模擬)投資金を誘致するために、必死になって頑張っていたせいかどの事業ブースも熱気に包まれていた。

事業説明会が終わると同時にキャンプのほとんどの日程が終了し、表彰式が行われた。うちのチームほどチームワークの良いチームは他にないと思っていたから、チームワーク賞をもらうのではないかと期待していたのだが、なんと、それよりも素晴らしい優秀賞を受賞した。チームメンバーたちとメンターさんに感謝すると同時に、4日間の努力が実を結んだようで、一生忘れることのできない嬉しい瞬間になった。それからは日韓の参加者による両国伝統衣装のファッションショーを鑑賞したり、特技披露をみたり、両国伝統遊びの体験をしたりしながらチームメンバーたちと楽しく面白い時間を過ごした。夜には、チーム毎に集まってゲームをしたり、夜食を食べたりしながら最後の夜という寂しい気持ちをどうにか紛らわそうと努めた。

最終日は、荷物をまとめて宿泊先をチェックアウトし、みんなで仁寺洞(インサドン)を観光しながら買い物をしたり、手鏡作りの体験をしたりした。日本の参加者が空港へ向かって出発する時間になると、思わず涙がこぼれてきた。チーム1のチームメンバーみんなとまた再会することなど簡単なことではないし、4泊5日が驚くほど早く過ぎてしまった気がしたからだと思う。

約1週間の間、日韓高校生交流キャンプを通して、たくさんを経験し、感じ

ることができた。今まで私が参加してきた様々な活動の中で、一番心に響くものがあったし、できることなら時間を巻き戻したいと思うくらい良いキャンプだった。

まず、日本の友達と一緒に飲食関連のビジネスを企画したおかげで、日本の食文化について理解することができた。次に、今回のキャンプの開催地は韓国だったけれど、日本の友達を通して日本についてたくさん学ぶことができた。またその過程で、異文化を勉強する人の立場にもなってみることができた。それだけでなく、韓国経済現場体験や事業ブース作りをする過程を通して、アイデアを共有し、意見をまとめながら他人の意見にも耳を傾ける姿勢について考えてみるきっかけにもなった。

未だに心だけはハイソウル・ユースホステルに残っているようだ。気まずくて先に

話しかけることもろくにできなかったキャンプの初日が昨日のここのようなのに、時間は飛ぶように早く過ぎていった。

韓国語がとても上手だったワカバ、可愛いミキさん、明るくてエネルギッシュなユナ、黙々とチームメンバーたちのために頑張ってくれたタカユキ、豊富なアイデアを出してくれたハヤト、しっかりしていて頼もしいチームの長女のハウオンさん、日本語が分からない私を助けてくれたルームメイトのスヒョン、事前説明会で最初に出会った時にはとても気まずかったけれど、キャンプ期間中にうんと仲良くなれたジョンヒョン、奇想天外だったりするけれど、チームメンバーたちの役に立とうと精一杯努力してくれたチームの末っ子のジュンヨン、みんな絶対に忘れないよ！

